様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 7 日現在

機関番号：34315
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2012
課題番号：21520217
研究課題名（和文）　大岡昇平文学の基礎的および総合的研究―構想ノート・草稿類を含む―

研究課題名（英文）　Research on the Literature of Shohei Ooka including the manuscripts

研究代表者
花崎　育代(Hanazaki Ikuyo)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：00259186

研究成果の概要（和文）：大岡昇平文学の研究において、自筆資料までを視野に入れたものは、ほぼ皆無であった。本研究は、この現状に鑑み、構想ノートや草稿段階からの大岡文学の基礎的総合的研究を企図した。研究の結果、第二次大戦後初期の作品である『俘虜記』『野火』「出征」等において、当初は＜俘虜＞を中心としたテーマが未分化の状態で混在していたこと、その後、「降服」の問題は『俘虜記』で、「社会的感情」の問題は『野火』で追究するなど分化していったことを検証、作家的出発期の作品生成を具体的に実証した。

研究成果の概要（英文）：Until now, researching on the literature of Shohei Ooka, we nealy have not study of Ooka ´ s manuscripts .In view of the condition, this research carried out studying included his manuscripts. The results are as follows. Right after WWⅡ,plural themes especially ‘ POW ’ were intermingled in the plots of his novels . Afterwards, the problem of ‘ surrender ’was investigated in “ Furyoki(Taken Captive) ”,and the problem of ‘ social emotions ’ was explore in “ Nobi(Fires on the Plain ”).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：日本文学
科研費の分科・細目：文学、日本文学
キーワード：大岡昇平　戦後文学　『俘虜記』　『武蔵野夫人』　『野火』　草稿研究　国文学　デジタルアーカイブ

１．研究開始当初の背景

日本近代文学を代表する作家のひとりである大岡昇平の文学研究においては、その作品において内容にかかわる改稿のおびただしい作品が多いにもかかわらず、その構想ノートや草稿類など自筆資料については、従来、一部を除いて公刊されることはなく、また、体系的にはほとんど研究調査が進んでいなかった。活字資料の生成過程については、大岡昇平生前に中央公論社版、岩波書店版の全集編纂の実務を担った池田純溢氏が夙に『野火』について論文「生成過程における「文体」稿の位置」（『日本文芸研究』1971 年）などで行っている。また吉田熙生氏も筑摩書房版全集（全 23 巻別巻 1）を主導的に編纂し、本文異同につき「解題」等で報告している。本

研究代表者花崎も大岡の代表的な三作品『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』の連関を初出稿から探究した論文「大岡昇平　戦後の出発」（『国文目白』一九八四年）以降、単著所『大岡昇平研究』（双文社出版、2003 年、第 12 回やまなし文学賞（研究・評論部門）受賞）にまとめた論考などで考察してきてはいた。しかしその先行研究における構想ノート・草稿類の調査は、畑有三氏が「構想ノートの検討」（『国文学』1968 年）を、樋口覚氏が『一九四六年の大岡昇平』（新潮社、1993 年）を、それぞれ活字化された資料で扱っている他、自筆資料については平松達夫氏が『三島由紀夫と大岡昇平』（朝日新聞社、2008 年）で、ごく一部の草稿を参照しているといったあたりであり、きわめて少ない。とくに戦後の作家的出発期におけるこれら自筆資料の研究は、『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』といった日本文学の代表作をやつぎばやに発表していった大岡昇平文学の生成過程を考究するためには基礎的かつ必須のものである。またこれらほぼ具体的な考究のなされていない自筆資料類は、対象とするこの時期の紙媒体資料の性質から鑑みても、資料劣化による研究不能に陥る危機的状況にある。こうした状況から自筆資料を含む大岡昇平文学の基礎的および総合的研究による大岡文学の生成過程の探究は今日において重要かつ喫緊の課題であった。

２．研究の目的

研究代表者花崎は、博士号を取得（2004 年）（文学、日本女子大学）した「大岡昇平研究」（および、これに基づいた前掲花崎単著『大岡昇平研究』）のほか、筑摩書房版『大岡昇平全集』第 23 巻（2003 年）の「参考文献目録・主要参考文献解題」を編纂著述、その他にも多くの大岡文学論文を執筆、発表してきた。本研究ではこれまでの研究をふまえながら、構想ノート・草稿類をも調査することを含めることによって、大岡文学の生成過程をはじめとして、より精緻な研究に発展させることを目的とした。

以下に少しく記す。

（１）　大岡昇平は改稿の夥しい作家であり、活字段階においてさえ、頻回にわたっており、作品が常に生成され続けていたこと、改稿過程探究の重要性を明証している。このためこれの解明を軸とした研究を目的とした。

なお、具体的な活字段階の改稿としては、たとえば①『俘虜記』において、作中人物間の物理的距離を初出誌―複数の単行本、全集の刊行の間、複数回書き直し、エピグラフの変更なども行っていること、②『野火』において中断を含む初出誌の段階（雑誌『文體』、雑誌『展望』）においても冒頭の大胆な削除を含む大幅な改稿を行っていること、などが挙げられる。

（２）　大岡昇平自筆資料の多くは神奈川近代文学館に収蔵され「大岡昇平文庫」などとして公開されている。しかし、直近の全集である筑摩書房版『大岡昇平全集』全 23 巻別巻１の刊行が 2008 年 8 月までを要し、その後の受け入れ、整理となったため、研究者による調査はまさにこれからという段階であった。よって、資料ごとの詳細な調査によって、大岡文学生成過程を中心とする研究を進展させることを目的とした。

（３）　日本近代文学における、活字化されていない草稿等の資料研究としては、本研究開始時において、フランス文学における生成研究を応用したものが注目されていた。松澤和宏氏（フローベール研究を夏目漱石研究に応用）、吉田城氏（プルースト研究を応用した芥川龍之介研究）などである。「生成論は方法や理論である前に、なによりもまず新たな対象の発見と構築」（松澤『生成論の探究テクスト　草稿　エクリチュール』、名古屋大学出版会、2003、ｐ.65）とされるように、構想ノート・草稿類から活字テクストへの変遷、さらなる活字段階での改稿、と、その豊富な異同を発見し調査し、検討を加えることで、作品の豊饒さを精緻に読み込むことを目的とした。

（４）　自筆資料の検討においては現物を丹念に探査することが肝要である。しかし本研究が主な対象とする敗戦直後からの戦後資料は、媒体（原稿用紙やノートなどの紙）の素材の品質が劣るだけでなく、経年劣化の著しさによって頻回詳細の調査に堪え得ないものと判断された。よって、将来的にも大岡昇平文学研究のみならずひろく近代文学研究において貴重な資料を保存するという観点においても、現物を重視しつつもデジタルカメラ撮影資料による検討によって、資料保全と探究の両立をめざした。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、大岡昇平の活字資料とともに構想ノート・草稿・校正刷書き込み等自筆資料、また、大岡旧蔵書籍等の調査探究という方法を採用した。

活字資料については、過去三回の大岡昇平全集（中央公論社版、自先々週の岩波書店版、筑摩書房版）はじめ公刊された大岡著述資料、また大岡に関する研究書籍や関連書籍等の参考資料を研究材料とし、読解考究した。必要に応じて日本近代文学館（東京都）、神奈川近代文学館（神奈川県）等に赴き、複写できるものについてはこれを行い、読解していった。

自筆資料や大岡旧蔵書籍については、この多くを所蔵している神奈川近代文学館を中

心に、日本近代文学館等に赴き調査考究、一眼レフデジタルカメラによる撮影の可能なものについてはこれを行うなどして、精緻な分析と考察を行うよう努めた。

自筆資料の読解には資料劣化の問題だけでなく、書き手の特性も結果に作用する。本研究の対象である大岡昇平自筆資料に関しては、文字が小さいことや略字が頻繁に用いられていることで、困難な部分も多く存在した。こうした判読困難な文字の読解の場合には、活字資料に自筆原稿の文字のまま定着した文字を参照し、これを用例として、確定作業を行う、という方法を採用した。

このように活字資料、自筆資料等を総合的に考究するという方法によって、異同―ヴァリアント豊富な振幅ある大岡文学テクストのより精緻で豊かな読解の開拓をめざした。

４．研究成果

大岡昇平文学研究において従来ほぼ皆無であった自筆資料を含む総合的研究を進展させた。とりわけ作家的出発期の代表作『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』を有し、かつ、資料劣化の懸念から緊急性を要する、戦後初期の自筆資料をデジタルカメラによる撮影を行うことにより詳細に分析、活字資料を含めた総合的な考察を行うことができた。この考察により、大岡自身が体験した俘虜をいかに考えるかという問題を中心に、大岡文学において当初は各作品に混在していたテーマが、『俘虜記』『野火』「出征」などに分岐し、それぞれの作品において展開されたことを、実証的に論証した。

なお、著作権継承者により、検証した自筆資料の影印の出版や全文翻刻は許可されなかったが、デジタルカメラによる撮影と論証に必要な最低限の翻刻引用掲載は許可された。こうしたご遺族―著作権継承者のご理解にもよって、本研究が可能となっていることも付記しておきたい。

また、神奈川近代文学館所蔵大岡昇平自筆資料のデジタルカメラによる撮影については、内藤由直、牟田悠、樋口彩乃、八原瑠里の各氏の助力を得た。

以下に本研究の具体的な成果を記す。

（１）　神奈川近代文学館所蔵『俘虜記』原稿は全部で 95 枚、ただし原稿ナンバー「83」に相当する一枚が欠落していることは、同館の調査で明らかになっていたが、本研究で、この箇所が、活字になった初出以降現行に至るまでの、俘虜になった時点における降服したのか捉まったのかといった叙述部分に相当することが判明した。どのような経緯で失われたのか、は不明であり、同館に収蔵される際にはすでになかった部分であるとのことである。

偶然失われた可能性もあることに関して、過剰な意味づけは研究を誤るため慎重に考えるべきではある。しかし、俘虜意識の問題に関する部分であること、この「俘虜記」の現在に至る改題が「捉まるまで」であること、以上を考えただけでも、欠落部分の重要性が明らかになったのみならず、大岡昇平において俘虜意識がきわめて大きな問題であったことが明確になった。

（２）　『俘虜記』原稿の精査を含む作品の考察によって、大岡文学の「私」における俘虜の表象が、GHQ 占領下という状況による制約以上に、作家自身の難問として、俘虜は＜ありうべからざるもの＞として考えられており、そのベクトルにおいて表出されようとしていたことが判明した。大岡と呼ばれる人物を「私」とする作品『俘虜記』において、俘虜になる箇所で、昏倒中の「私」が米兵に腰部を蹴られて覚醒する場面、削除されたものの当初記された文言に、腰部を蹴ったのが「僚友」ではと思って「一瞬」ではあるが「喜」んだ、という記述が見出せた。

（「喜」は、作品全体のトーンと比して感情的にやや激しい感があるため、慎重を期して、同原稿において別の箇所に存在する、すでに初出「俘虜記」に定着した同一文字を含む「狂喜」の文字との照合を行い、自筆資料において同一の「喜」の文字であると判断した。）

これまでの活字資料のみによる研究代表者の考察に、より盤石な根拠を提出することができた。

（３）　『野火』草稿として一束にされている自筆資料からは、公刊された『野火』「出征」（昭 25・３）が生成されたことが判明した。同じ＜水＞についての感想をもつ両作品ではあるが、①当初はこれについてのテーマは混在していたこと、②出征の経緯や家族・僚友とのやりとりといったより記録的な記述は「出征」で、水の連続的流れからより痛切な生の連続性への希求という個の問題は『野火』で、と各々テーマを分岐深化させていった。以上のことが明瞭となった。

（４）　同じく『野火』草稿として一束にされている自筆資料からは、当初、敗北近い戦場においての僚友に関する記述や、俘虜存在への違和感がかなりの分量で記されていたこと、戦場のありようを語るにして生き残った「私」の、生死不明の僚友への感情をまず記さざるを得なかったことが明らかになった。結果的に削除された記述には、自らは意図的に俘虜になろうとすることへの違和や嫌悪、一方で傷兵を救護し「赤十字の印」を手作りして僚友は‘無事に’俘虜となれるようなてだてを尽くす、といった記述を発見した。これらが存在したこと、さらにはこれらを削除したことは、大岡において俘虜につ

いてのきわめて強い問題意識があったこと、さらにはそれが潜在し続けていったことが明確になった。

（５）　「武蔵野夫人ノート」と題された創作ノートは、調査の結果、大岡生前はやくに公刊されているものには存在する昭和24年「八月」の部分が、明らかな切取りにより失われていた（所蔵の同上館でも把握していない事態であった）。これも失われた経緯は明らかではなく、大岡本人によるのか、他者によるのか、不明である。しかし、この創作ノートを調査した結果、公刊時には改稿している部分が存在することも明らかとなった。このことから、当該遺失部分に公刊されたもの以外の記載があった可能性も否定できない。遺失部分は、本研究代表者花崎が昭和59年2月『国文目白』にて指摘し、筑摩版全集の「年譜」にも記されているように、『武蔵野夫人』依頼時期について従来の「六月」説以外の別説である「八月」説に関わる事項が記されていた可能性もある。この件も予断による探究は建設的ではないものの、本自筆資料研究によって、『武蔵野夫人』生成の出発時点に関して、この創作ノートのもつ意味の大きさが改めて明らかになった。

（６）　活字資料と同時代状況の精査を中心とした考究によって、大岡がカミュ『異邦人』が翻訳された昭和26年に発表した『野火』には同時代的な小説殺法の問題が存在することが見出された。すなわち、作品の中盤で大きな出来事（殺人）が起こり、これを抱えながら作品が展開するという骨法である。カミュへの言及からわかることは、大岡は自身の『野火』のこうした作法についての再認識である。少なくとも、意図しない殺人とその後、という作品構造の同時代性を見出すことができた。

（７）　同時代作家の三島由紀夫と大岡昇平との作品読解によって、両者が単に「鉢の木会」グループであるというだけでなく、その作法の根幹において、共に、＜あまりに～なので、……（でき）ない＞という思考形式を多く採用、表現していることを確認した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

（１）花崎育代、大岡昇平『野火』草稿にみる『俘虜記』との分岐、差異化と生成――「動物的」な「恐怖」「愛情」から「社会的感情」「生物学的感情」へ――、立命館文學，第630号、2013、査読なし、pp.278-285.
（２）花崎育代、草稿からの分化、作品生成へ――大岡昇平「出征」と『野火』――、国文目白、第52号、2013、査読なし、pp.171-176.
（３）花崎育代、大岡昇平における＜不条理＞――俘虜・赤十字・カミュ――、昭和文学研究、第65集、2012、査読あり、pp.24-34.
（４）花崎育代、三島由紀夫と大岡昇平――『聲』創刊前の「鉢の木会」時代を中心に――、三島由紀夫研究、12、2012、査読あり、pp.37-48.
（５）花崎育代、大岡昇平手稿「俘虜記」の考察――僚友・「私のプライド」・俘虜の＜恥＞――、論究日本文學、第96号、2012、査読なし、pp.99-113.
（６）花崎育代、『聲』の自筆原稿―戦後画した「鉢の木会」から発信―、館報（日本近代文学館）、第242号、2011、査読なし、p5.

〔学会発表〕（計２件）

（１）花崎育代、大岡昇平の自筆資料を調査して、日本近代文学館図書資料委員会、於・日本近代文学館（東京都）、2013年5月11日。
（２）花崎育代、恋愛と結婚と――大岡昇平・スタンダール・司祭アンドレ、国際高等研究所、於・国際高等研究所（京都府）、2010年3月5日。

〔図書〕（計８件）

（１）　花崎育代、恋愛と結婚と：大岡昇平・スタンダール・司祭アンドレ、受容から創造性へ――日本近現代文学におけるスタンダールの場合――高等研報告書1202（研究代表者ジュリー・ブロック）、2013、査読なし、pp.101-105.（フランス語版は下記（２）、2011刊。）
（２）　HANAZAKI IKUYO(traduction Patrick Honnoré et Sekiguchi Ryôko),L'amour et le marriage-Ôoka Shôhei,Stendhal et André le Chapelain,RÉCEPTION ET CRÉATIVITÉ,2011, 査読あり、pp.255-264.
（３）　花崎育代、大岡昇平、日本語　文章・文体・表現事典（中村明他編）、朝倉書店、2011、ｐ520（総頁829）.
（４）　花崎育代、大岡昇平、山崎正和、吉武輝子、兵庫近代文学事典（日本近代文学界関西支部　兵庫近代文学事典編集委員会編）、2011、順に p62,p345,p362（総頁376）.
（５）　花崎育代、大岡昇平研究、双文社出版、2011、312ｐ.(2003年刊の修正増刷。)
（６）　花崎育代、近代文学はどこにある―近代文学作品を読むためにはどの本を読んだらよいのか―、他、ハンドブック

近現代文学（立命館大学日本文学会編）、2009、pp.15-35,pp.101-105,pp146-148.
（７）　花崎育代（編著）、小松清――フランス知識人との交流、柏書房、2010、607ｐ.
（８）花崎育代、柳美里と鷺沢萠―東京・神奈川―錯綜と断絶をかかえて、韓流百年の日本語文学（木村一信・崔在喆編）、人文書院、2009、pp.250-275.

６．研究組織

(1)研究代表者

花崎　育代（Hanazaki Ikuyo）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：00259186

(2)研究分担者

なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

なし　　（　　）

(4)研究協力者

内藤　由直（撮影）(Naitoh Yoshitada)
（立命館大学・ポストドクトラルフェロー→龍谷大学・講師）
研究者番号：
牟田　悠（撮影）(Muta Haruka)
樋口　彩乃（撮影）(Higuchi Ayano)

八原　瑠里（撮影）(Yahara Ruri)
（立命館大学大学院生）